4　列国の対満経済発展活動

736　昭和10年1月31日　在独国武者小路(公共)大使より広田外務大臣宛(電報)

独国ツェッペリン社による飛行船対満売込み運動の風説にベルリン本社困惑について

付　記　昭和九年十二月八日付小栗(一雄)警視総監より広田外務大臣他宛公信外秘第三五六七号

ハイエらによる日本での右売込み運動について

ベルリン　1月31日後発
本　省　2月1日前着

第二四號

「ツエツペリン」會社「エツケナー」博士二十九日本使ヲ來訪シ滿洲國ニ於テ「ツエツペリン」飛行船ヲ買入レントスルヤノ風説傳ヘラルル處自分ハ未タ同飛行船運用ノ能力ヲ有セサルヘキ滿洲國ニ之ヲ賣渡スカ如キハ同飛行船ノ名聲ニ懸ケ同意セサル旨ヲ述フルト共ニ無關係ノ第三者カ之ニ介入シテ居ルヤニテ不平ヲ洩シタルカ尚三菱ノ同社代理權ハ近ク滿期トナル處同社トシテハ日本政府ノ利益ニ合スルナラハ右代理權ヲ繼續セシムル意嚮ナリトテ本使ノ意見ヲ求メタルニ付本使ハ右孰レモ何等承知シ居ラサル旨簡單ニ答ヘ置キタルモ右ニ付テハ何等錯綜セル事情モアルヤニ推察セラルル節無キニ非ス旁當館トシテハ此ノ種取引ニ「コンミツト」スルノ意無キモ今後ノコトモ有之本使含ミ迄ニ本件事情承知シ置キ度キニ付貴方ニテ判明シ居ラハ大要御回電詳細郵報アリタシ

(付　記)

外秘第三、五六七號　(昭和9年12月10日接受)

昭和九年十二月八日　警視總監　小栗　一雄

内務大臣　後藤　文夫殿
外務大臣　廣田　弘毅殿
神奈川、山口、兵庫、福岡、朝鮮、關東、各縣知事殿
各警務局長殿

對滿投資關係獨逸實業家「ハイエ」ノ退京ニ關スル件

帝國ホテル止宿

在大連對滿投資獨逸實業家代表
獨逸人　ヘルディナンド、ハイエ　Herdinand Heye　(37)
妻　同　伴

右者今回獨逸「ツエツペリン」工場株式會社ノ飛行機賣込運動ノ爲メ渡來セル滿洲駐在獨逸通商代表部員「ブライトハウプト」ヲ援助スヘク客月二十一日入京肩書ホテルニ止宿セル趣ハ既報(九、一一、二六外秘第二、四二六號)ノ處入京後前記「ブライトハウプト」ヲ伴ヒ兒玉拓相、大角海相、林陸相ヲ歴訪スル一方獨逸大使館丸ノ内獨逸製鋼會社ヲ訪問打合ヲ爲シツツアリタルカ一應用務終了セリトテ本月二日神戸ニ向ケ退京セリ、歸連ノ上同地ニ於ケル本名主宰ノ獨滿商事會社ヲ通シ前記賣込ニ關シ滿洲國側奔走スル模様ニ有之

右及申(通)報候

737　昭和10年2月2日　在仏国佐藤大使より広田外務大臣宛(電報)

旧ドリル側財団が満州企業組合設立契約放棄を表明し満鉄が同意すればドリヴィエ側財団と合同し新会社設立の旨通報について

パ　リ　2月2日後発
本　省　2月3日前着

第四一號

貴電第九號ニ關シ(滿洲企業組合解散)

一月三十日附「モアラン」ヨリノ來翰ニ依リ

(一)(イ)客年貴電第二八八號御問合ノ點ニ付テハ一月三十日ノ佛「サンジカ」總會ニ於テ「ドリル」「デユフール」ノ理事者辭任「モアラン」ノ理事新任ヲ確認シ且「ド」及「デユ」ヨリ滿洲企業組合設立ノ滿鐵トノ契約(「ドリル」契約)ニ對シテハ一切ノ權利ヲ放棄スル旨ノ書翰ヲ受領シタル旨及

(ロ)冒頭貴電ニ付テハ客年往電第五三八號ノ(一)Sadam ノ法律上ノ設立行爲ト共ニ「ドリル」契約無效トナルコトニ「モ」側ト「フ」側トノ合意成立シ滿鐵側カ右ニ正式同意ヲ與フル時ハ直ニ Sadam 設立行爲ノ手續ヲ爲スヘキコト且同時ニ十萬法ハ「モ」側ヨリノ出資トシテ Sadam ノ勘定ニ移シタキ旨

(二)又客年往電第五三八號ノ(二)ノ(ヘ)ノ役員トシテ「デユ」、

「ガスタンビード」、「オウト」ヲ選任スヘキ旨通告アリタリ

尚「デユ」ヨリ前記(一)ニ付滿鐵側ノ同意至急取付盡力方依賴アリタリ

738 昭和10年2月8日 在満州国南大使より広田外務大臣宛(電報)

満州国政府はツェッペリン社製飛行船購入の意志はないが独満関係好転に効果ある独国工業製品購入には異存なき旨表明について

新京 2月8日後発
本省 2月9日前着

第一一五號

在獨大使發閣下宛電報第二四號及獨宛貴電第八號ニ關シ日滿合辨ノ航空會社ヲ設立シ「ツエツペリン」飛行船ヲ購入スルノ件ニ關シテハ關東軍ニ於テハ飛行船カ軍事上ノ價値乏シキノミナラス輸送機關トシテモ速度遲ク操縦困難ニシテ地形、天候、氣象等ノ影響ヲ受クルコト多ク加フルニ高價ニシテ營利事業トシテ極メテ危險性大ナルコト等ノ理由ヨリ反對ノ意嚮ヲ有シ日滿短時間聯絡ハ寧ロ優秀旅客機ヲ以テ之ヲ具體化セントスルノ計畫ヲ有シ居リ東京陸軍側ニ於テモ同意見ニシテ此ノ際滿洲國政府ヲシテ本問題ニ關知セサルコトヲ聲明セシムル等ノ適當ノ手段ヲ執リタキ意嚮ヲ有シ居ル趣ナリ、尤モ滿洲國ノ財政之ヲ許シ滿獨關係ノ好轉ニ效果アルニ於テハ飛行船ニ代フルニ或程度ノ飛行機、機械類等ヲ獨逸ヨリ購入セシムルコトニ關シテハ異議無キ趣ナリ

獨ニ轉電セリ

739 昭和10年2月15日 在満州国南大使より広田外務大臣宛(電報)

ベルギー実業家による満州国への視察団派遣計画進行中につき満州国側対処方針を在ベルギー有田大使より照会について

新京 2月15日前発
本省 2月15日後着

第一三八號(極秘)

白發本使宛電報

第一號

白國實業家カ滿洲國ノ市場ニ着眼シ居ルコトハ御承知ノ通ナル處最近ニ至リ滿洲國ニ實業視察團ヲ派遣スヘシトノ議擡頭シ朝野ノ支持ヲ得ツツアル模様ナルカ現ニ日白協會書記長又在「リエエジユ」名譽領事等斡旋ノ下ニ其ノ實現ヲ
(欄外記入)
計畫シ居リ追テ外務省ノ「パトロネエジユ」ヲ受クヘシトノコトナリ

右ニ對シ當館トシテ積極的支援ノ態度ヲ執ルヘキヤ否ヤハ要スルニ外國ノ對滿輸出乃至投資ニ對スル滿洲國側ノ方針如何ニ懸ルノミナラス假ニ滿洲國側ニ於テ之ヲ歡迎スルトシテモ例ヘハ投資ノ場合ノ如キ事實上外國喙入ノ餘地無キカ如キ實狀ナルニ於テハ視察團ノ派遣カ徒ニ失望ヲ與フルコトトナリ却テ面白カラサル次第ナルニ付此等ノ諸點ニ關スル貴見本使參考迄ニ御回電ヲ請フ

大臣ヘ轉電アリタシ

(欄外記入)
政治家意味ニテ歡迎スベキモ實際經濟的ニハ餘地ナカラン

740 昭和10年2月18日 在満州国南大使より広田外務大臣宛

仏国モパン社の代表が東亜土木会社との合資会社設立交渉への援助を要望について

(2月25日接受)

公普通第二四五號

昭和十年二月十八日

在滿洲國
特命全權大使　南　次郎[印]

外務大臣　廣田　弘毅殿

「ブロサール、モパン」會社代表「メルレ」來滿ニ關スル件

本件ニ關シテハ二月九日附公第一九八號ヲ以テ及報告置キタル處「メルレ」ハ二月六日新京ニ到着翌七日當館ニ出頭シ係官ニ對シ東亞土木「モパン」社トノ間ニ結ハレタル「ミユチユアル、コンセント」ニ基キ設立セラルヘキ日佛合辨會社ニ關シ全權ヲ委ネラレ來滿シタル次第ヲ告ケ今後共大使館側ノ援助ヲ希望スル旨述ヘタル趣ナルカ其際同會社ノ引受クヘキ具體的事業ノ提供ニ關シテモ當方ノ盡力ヲ希望スル如キ口吻ヲ洩シ居タル趣ナリ同人カ係官宛送付シ

來リタル東亞土木作成ニ係ル會社定款及覺書案寫(省略)別添送付ス尚同人ハ滿鐵ト交渉ノ爲十三日大連ニ向ヒタル趣ナリ

右報告申進ス

本信寫送付先、佛國大使

741　昭和10年2月19日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛(電報)

日本以外の国の対満経済競争参入は政治的理由のない場合ほぼ不可能でありベルギー実業家の視察団派遣計画善導方有田大使へ要請について

新　京　2月19日後発
本　省　2月19日後着

第一四四號(極秘)

本使發白宛電報

第一號

貴電第一號ニ關シ

滿洲國ハ建國以來經濟的門戸開放ヲ標傍シ且對外通商貿易ノ發展助長ヲ企圖シ居ルコトハ御承知ノ通ナルモ實際上ハ建國早々ノ特殊事態ニ鑑ミ國防上等ノ理由ニ依リ經濟統制及重要資源ノ確保等ニ重點ヲ置カサルヲ得サル事情アルノミナラス日滿間不可分關係ノ根本原則實施ノ爲ノ經濟提携ニ關スル具體的問題ニ付テハ引續キ種々研究ノ餘地鮮ナカラサル今日外國資本ノ流入ヲ容易ナラシメ又ハ外國人ノ企業經營乃至資源開發ノ如キコトヲ自由ナラシムルコトハ國策遂行ニ支障ヲ來タス虞アル一方近時對外躍進ヲ遂ケツツアル我國ノ資本技術材料等ヲ利用スルコト最有利ナル滿洲國ニ於テ第三國人ノ自由競爭ハ殆ント不可能ナル狀態ニ在ルノミナラス更ニ貿易方面ニ於テモ滿洲國ハ現在輸入超過緩和ノ爲努力シツツアル折柄ナレハ「バーターシステム」等ノ方法ニ依リ滿洲國特產品買入ヲ此ノ上增加セサル限リ外國品ノ輸入增加ヲ計ルコトハ差當リ見込薄ト見ル外無シ現ニ諸外國事業家來滿ニ際シ當方ニ於テハ軍部滿鐵滿洲國側當局等ト協議ノ上機宜ノ措置ヲ執リツツアルモ此レカ應酬ニ苦心シツツアル狀態ナリ唯客年英國視察團來滿ノ際ハ客年大臣發在英大使宛電報第一四四號ノ如キ特殊政治的理由アリタル次第アルモ白國等此ノ種理由無キ國ニ對シテハ自ラ異リタル考慮ヲ拂ハサルヲ得サル次第ニ付以上ノ諸點御含ミノ上本件計畫ニ對シ然ルヘク御指導相成樣致度シ

大臣ヘ轉電セリ

742　昭和10年2月23日　広田外務大臣より在ベルギー有田(八郎)大使宛(電報)

第三国の対満経済参入問題への対応は在満州国南大使の示した同国事情が参考となるので在欧米各公館に転電方訓令

本　省　2月23日後5時10分発

第七號(極秘)

在滿大使發貴官宛電報第一號ハ諸外國ノ對獨投資問題ニ關スル現地ノ事情ヲ好ク說明シ居ルモノト認メラルルニ付在滿大使宛貴電第一號ト共ニ(兩電報共「コード」ニ組換ノコト)在歐米各大公使、壽府及紐育ニ暗送アリ度

本電在歐各大使、壽府、在米大使、紐育ニ轉電シ在歐各公使、米ヲ除ク在米各大公使ニ暗送アリ度

在滿大使ニ轉電セリ

743　昭和10年3月5日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛

満州国での採金事業参入を求める英国企業と満州採金会社との契約交渉停滞について

公機密第三三〇號　(3月11日接受)
昭和十年三月五日

在滿洲國
特命全權大使　南　次郎(印)

外務大臣　廣田　弘毅殿

「ブリナー」ニ關スル件

「ブリナー」ノ滿洲國金鑛開發ニ關スル申出ニ付滿洲國政府カ大体許可ノ方針ヲ決定シタル次第ハ客年九月下旬往電ヲ以テ申進置キタル處其後客年十月三日關係機關代表者會合本件處理方針ヲ協議シ更ニ一月十九日前記協議ニ基キ別紙ノ如キ處理要綱ヲ決定シ其後右ニ基キ「ブリナー」ト採金會社トノ間ニ引續キ交渉行ハレ居タルカ鑛區使用料ニ關シ採金會社側ハ大体總產出量ノ五分乃至一割五歩(分カ)ヲ固執シ「ブリナー」ハ斯クノ如キ高率ニテハ到底「セレクション、トラスト」本社ヲ說得スルコト不可能ナリト主張シ相讓ラス目下交渉停頓ノ狀態ニ在リ當方トシテハ在來ノ經緯ニモ鑑ミ鑛區使用料ノ如キ細目事項ノ爲全体ノ交渉ヲ危機ニ瀕

セシメ從來本件交渉進展ニ依リ滿洲國ノ門戸開放機會均等ニ關シ第三國人ニ與ヘ來リタル好印象ヲ害スルカ如キコトハ大局上面白カラスト認メ係官ヲシテ採金會社實業部方面ニ夫レト無ク妥協方説得セシメツツアリ

右不取敢報告申進ス

本信寫送付先　英國

（別　紙）

康德二年一月十九日

實業部

ブリネルニ對スル採金事業許可ニ關スル件

一、方針

ブリネルニ對シ一定地域内ニ於テ第一階梯トシテ調査ヲ許可シ調査ノ結果經濟價値判明シタル後請負形式ニ於テ採金事業ヲ認ムルコト

二、要綱

イ、**ブリネル**ノ希望スル指定地域黑龍江湯旺河流域ニ限ルコト

ロ、實業部ハ**イ**號ノ地域ニ付一應採金會社ニ對シ調査ノ許可ヲ與ヘ採金會社ハ**ホ**號ノ要綱ニヨリ**ブリネル**ニ調査セシムルコト

ハ、調査實施ニ關シテハ採金會社ト**ブリネル**間ニ協議セシムルコト

條件確定シ契約調印スル場合ハ豫メ實業部ノ承認ヲ受クルコト

ニ、前號契約調印前ニ於テ豫メ**ブリネル**カ**セレクシヨントラスト**ノ駐滿代表タル資格ヲ明瞭ナラシムルコト

ホ、採金會社ト**ブリネル**トノ協定要項ハ左記ヲ基準トシテ之ヲ定ムルコト

(1)調査期間(A)準備期間ヲ一年トシ(B)實施期間ヲ二年トスルコト

(2)指定區域内ノ調査目的鑛物ハ砂金及山金ニ限ルコト

(3)指定區域内ニ於ケル民間既得權ヲ侵害セサルコト

(4)調査費用ハ一切**ブリネル**ノ負擔トス

(5)物資購入、勞働者ノ雇用條件等ハ會社ト連絡統制ヲ保ツコト

(6)調査期間中ニ於ケル生命財産等ニ關シテハ採金會社ハ一切其ノ責ニ任セサルコト

(7)調査終了シ採金請負ヲ爲ス場合ノ條件ハ採金會社ノ請負規定ニヨルコト

744　昭和10年3月20日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

イタリアにおいて対満輸出発展のため有力企業による組合が組織され満州国への視察員派遣を計画中について

機密第八三號　（4月12日接受）

昭和十年三月二十日

在伊

特命全權大使　杉村　陽太郎〔印〕

外務大臣　廣田　弘毅殿

伊國工業團體ノ滿洲國視察員派遣ニ關スル件

本件ニ關シテハ不取敢電信ヲ以テ報告スル所アリタルカ三月十三日「ド、バッサン」本使ヲ來訪シ(彼ハ五年前迄天津ニ居住シテ滿洲ヲ研究シ滿鐵ノ信用、極東ニ於ケル日本ノ勢力等ヲ熟知スト稱シ居レリ)伊國ノ工業家ハ多年「ロシア」、「トルコ」等ノ方面ニ對スル企業ノ經驗アリテ「フイアト」ノ如キハ銀行ヲ有シ長期ノ「クレデイツト」ヲ與フルノ實力ヲ有ス英國ハ曩ニ有力ナル視察團ヲ滿洲國ニ送リ佛國モ近ク之ヲ派遣スヘシトノコトナルカ故ニ「フイアト」其他伊國ニ於テ最モ有力ナル工業團體カ集リ「ムツソリーニ」ノ内諾ヲ得テ滿洲國ニ働キ掛ケントスルモノナリ主トシテ機械類、鐵道關係材料ノ賣込ヲ目的トシ日本トモ出來得レハ喜ンテ協力スヘシ先ツ伊國ニ於テ充分研究シタル上ニテ視察員ヲ送リ以テ實地調査ヲ行ハシメ而シテ後漸次歩ヲ進メ行カント欲スト語リ談話ノ裡ニ張學良ニハ失望シ支那ニ愛想ヲ盡カシタルカ如キ感ヲ與フル節アリタル故之ニ對シ伊國側カ政治的ニ支那ニ活躍セントシ張學良ト結ンテ飛行機ノ賣込ヲ爲シタルカ如キハ實ニ日本側ノ誤解ヲ招キ居ルカ東亞ノ形勢ハ兩三年來殆ト一變セリ滿洲國ニ對シテ策動スルニハ先ツ日、支、滿ヲ包括スル東亞全局ノ新ナル狀勢ヲ審ニセサルヘカラス日本ノ實力ヲ無視又ハ輕視スルカ如キ事業ハ必ス失敗スヘシ日本ノ「リーダーシツプ」ヲ認メサルカ又ハ之ニ反抗スル企畫ハ將來順調ノ進展ヲ爲スコトハ出來ヌト思フ滿洲國ト日本トノ關係ニ付テ云ヘハ日本ハ之カ爲ニ聯盟ニ於ケル重要ナル地位ヲ犧牲トシ

且平和的事業ヲ經營スルニ必要ナル治安維持ノ爲現ニ非常ナル犧牲ヲ拂ヒ居レリ各國カ滿洲國ニ投資シ得トスレハ夫ハ一ニ日本ノ犧牲ノ賜物ニシテ日滿ノ特殊關係ヲ土臺トシテ初メテ出來ルコトナリ加之地理的經濟的理由ヨリ滿洲國トノ通商ニ日本カ斷然有利ナル地位ヲ占メ居ルコト云フ迄モナシ尚又滿洲國自体トシテモ國防上又ハ國家ノ存立上或種ノ事業ハ之ヲ外國人ノ手ニ委スルコトヲ得ス門戸開放ノ原則ニ對シ此等ノ例外ノ存スルコト蓋シ止ムヲ得サル所ナリ伊國ノ工業家カ滿洲國ニ働キ掛ケントスルナラハ先ツ日本ノ工業トノ競爭ハ絶對ニ之ヲ斷念セサルヘカラス英、米、獨、佛等ノ事業ニ割込ムコトカ主ニシテ而カモ夫々日本ヲ中心トシ一ノ經濟單位ヲ形作ラントシツヽアル東亞全局ノ新ナル形勢ヲ認識シタル上ニテ爲サルヘキコトナリト說聞カセタル譯ナリ

滿洲國ニ對スル各國ノ視察團ヲ如何ニ取扱フヘキカニ關シテハ駐滿大使ヨリノ意見ノ次第モアリタルカ既ニ充分準備ヲ整ヘ將ニ視察ヲ爲サントシ居ルモノニ對シテ無礙(下カ)ニ拒否ノ態度ヲ取ル如キハ門戸閉鎖等ノ誹ヲ受クルノ虞モアルニ付寧ロ東亞全局ニ對スル我カ優越的地位ヲ認識セシムル方得策ナリト思料シ右ノ如ク應酬セル次第ナリ

尚「ド、バツサン」ハ別紙(編注)寫ノ如キ該計畫ニ關スル要領覺書ヲ提出シ其ノ后段一乃至五ニ成ルヘク速ニ當方ノ意見ヲ承知シ度旨申越シタルニ付テハ右ニ對スル回答振何分ノ義御回示相成度右要領覺書ノ邦譯文相添ヘ此段稟申ス

覺　書(譯文)

伊滿兩國間經濟關係發展ノ目的ヲ以テ「フイアト」(一般機械工業)「ピレリ」(護謨製品、電線)「エルコレ、マレリ」(發動機)「マグナチ、マレリ」(電氣機械及「ラジオ」)「イドロボランチ、アルタ、イタリア」(「サボイア」型航空機)ノ諸工業團體ハ De Bassan 氏議長ノ下ニ委員會ヲ組織セリ

本委員會ハ滿洲國向商品ヲ製產シ對滿輸出ニ適應スル技術上及金融上ノ能力ヲ有スル總テノ伊國工業ヲ包含スル組合ヲ組織セルカ第一段階ニ過キス而シテ前記諸會社ハ外國ニ對シ永キ經驗及大ナル利害關係ヲ有スルヲ以テ已ニ右條件ヲ具備シ居レリ

本發案ハ嚴格ニ私的性質ヲ有シ特ニ伊國品ノ對滿輸出ノ發展ヲ目的トスルモノナルカ發起人ハ本計畫ノ實現ヲ妨クル種々ノ困難竝兩國工業家間ノ諒解ニ依リ相互ノ利害關係ノ廣汎ナル基礎ヲ作ル必要ヲ知悉シ居レリ

此見地ヨリ次ノ實行方針ヲ得タリ

(a)發起人ニ依ル調査竝官邊ノ情報ニ基キ日本品ト直接競爭トナルコトナク滿洲國ニ於テ有利ニ捌カレ得ヘキ伊國品ノ品質及形狀ヲ決定スルコト斯ル商品ハ主トシテ各種機械發動機電氣機械機關車牽引車飛行機等ニシテ概シテ交通機關及公共用設備ノ改善工場ノ建設及改造竝一九三三年ノ都市計畫ニ依リ建設セラルヘキ新中心地ノ組織等ニ用ヒラルヘキ材料ナルヘシ

(b)伊國政府ノ許與スル特典ニ基ク經濟ニ依リ廉價ナル提供ヲナシ地方的需要ニ應スルコト

(c)協調的精神ヲ以テ支拂期日及方法、代理者ノ取分割合、伊國特許狀ノ交付及使用、新設工業ノ共同設立及共同經營土木事業ノ實施等有ユル條件ニ付協議スルコト而シテ購買者ノ希望スル條件ノ受諾ハ當事者間ノ接近ヲ齎スヘシ

發起人ノ意圖ハ斯ル約款ニ依リ恒久的性質ヲ有スル眞ノ技術的及經濟的協力ヲ齎ラサントスルニ在リ

上記意見ハ特ニ滿洲國ニ對スル伊國重工業品ノ供給ニ關ス滿洲產農產物ノ對伊輸出ニ關シテハ發起人ハ關係國政府ニ於テ之カ求償ヲ研究スヘキモノト思料ス伊國カ最近採レル新貿易政策ニ依ルモ本計畫ハ將來ノ保證タルヘキ利害關係創設ヲ目的トスルモノナルヲ以テ正式交涉ヲ容易ナラシムヘシ之カ實行ニ關シテハ發起人ハ場合ニ依リ日本ヲ經由シテ滿洲ニ使節ヲ派遣セントスルモノナルカ外國使節カ準備不十分ノ爲純然タル視察又ハ訪問以上ニ出ツルヲ得サリシカ如キ失敗ヲ避ケント欲スルモノナリ則チ直接關與スル工業ヲ代表シ且商議成立ニ必要ナル一切ノ要素ヲ具備スル實業家及技術家ヲ以テ使節ヲ構成セントスルハ前車ノ轍ヲ履マサランカ爲ナリ前記使節ハ最初ハ恐ラク局限セラレタルモノナルヘキモ兎モ角具体的ナル成果ヲ齎スコト肝要ナリ

(此點ハ最初ノ努力ノ廣大ナル市場及特ニ日伊貿易ニ及ホスヘキ反響ニ思ヲ致ストキハ說明ノ要無カルヘシ)

第一回ノ實績ヲ見タル上ハ委員會ヲ伊國工業界ノ精英ヲ以テスル販賣組合ニ改メ滿洲ニ代理店ヲ常設スヘク「ミラン」ニ其ノ附屬事務所ヲ設ケ加盟工業間ノ聯絡竝註文ノ履行ニ當ラシムヘシ

斯カル計畫ノ成功ヲ期スル爲ニハ周到ナル準備ヲ要スルヲ以テ發起人ハ事業ノ經濟條件ヲ最モ有利ナラシムル爲伊國組合、交通、大藏各省ノ許與スル特典ニ依賴スルト共ニ日本政府ノ之ニ對スル歡迎竝有效ナル協力ヲ求ムル次第ナリ發起人カ所期ノ目的達成上缺クヘカラスト認ムル日本ノ協力ハ先以テ以下質問ニ對スル詳細ナル回答ニ在リ

一、滿洲國ニ於テ有利ニ捌キ得ル伊國品如何

二、有力輸入業者カ普通受諾スル購買方式如何

三、日本又ハ滿洲國ノ利益ト多少トモ直接協力スルコトヲ目的トスル其他ノ條件ニシテ伊國生產者ノ業務ヲ容易ナラシムルモノ如何

四、伊國工業品ヲ購買シ得ル南滿鐵道會社以外ノ主要商事會社如何

五、遣滿使節ノ極東滯在ヲ最モ效果的且建設的ナラシム旅程及行事如何

日本ノ協力ハ使節ノ準備上缺クヘカラサル重要性アルヲ以テ委員會ハ在羅馬日本大使館ヲ經テ入手スヘキ前記質問ニ對スル回答ニ從フコトトスヘシ

本發案ハ新制度以來最初ノ伊國工業ノ滿洲ニ對スル重要ナル努力タル點ニ興味アルモノニシテ全然私的性質ヲ有スト雖伊滿兩國間恒久關係ヲ樹立シ得ヘキコトヲ期待シ居レリ直接接觸ノ途ニ出テントスルハ正式交渉ニ於テ見ル能ハサル有效迅速ナル手段ナレハナリ

發起人カ獨リ私的利益ノ滿足ニ止マラス兩國間ノ理解親善及漸進的協力ニ資センコトヲ期待スルハ實ニ此信念ニ基クモノナリ

編　注　要領覚書原文は省略し邦訳文のみ採録。

745　昭和10年3月28日　広田外務大臣より在仏国佐藤大使宛（電報）

満州企業組合解散に満鉄同意について

本　省　3月28日後1時発

第五六號

貴電第一〇〇號ニ關シ

滿鐵側ニ確メタルニ二十六日往電第九號監督官廳ノ認可ヲ經タルヲ以テ近々貴電第四一號㈠「モアラン」側申出ニ異存無キ旨ノ回答ヲ發出スヘキ手筈ナル趣ナリ

尙「フージエール」渡來ノ件關係者ニ就キ御確メ相成結果電報アリ度

746　昭和10年3月28日　広田外務大臣より在満州国南大使宛

カナダ商業会議所の東洋視察団が途次満州国訪問の予定につき便宜供与を満州国側に要請方訓令

亞三機密第三八一號

昭和十年三月二十八日

外務大臣　廣田　弘毅

在滿洲國

特命全權大使　南　次郎殿

加奈陀商業會議所東洋視察團ノ滿洲國視察ニ關スル件

本件ニ關シテハ客年十二月十日附通二機密第九五三號往信ニ依リ既ニ御承知ノ通ニシテ其後更ニ在加公使及在晩香坡領事ヨリ別紙ノ通申越ノ次第アル處加奈陀ニ於ケル對日感情好轉ノ機運ニ付テハ本年二月二十八日附亞一機密合第二九八號往信其ノ他ニ據リ御承知ノ通ノ次第モアリ本件視察團ニ於テ單ニ支那國ノミノ視察ニ止メス滿洲國ヲ視察スルコトトシ日滿側ニ於テ視察上適當ノ便宜ヲ供與シ諸般ノ事情ヲ了得セシムルコト時宜ニ適スト認メラルルニ付テハ右御含ノ上滿洲國側乃至關係方面トモ御連絡ノ上何分ノ儀御回報相成度此段申進ス

別紙第一　加奈陀實業視察團ノ滿洲國視察ニ關スル件（昭和九年十一月廿七日附在加公使來信機密公第一九九號寫）

別紙第二　加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件（昭和九年十一月十九日附在晩香坡領事來信機密公第三四五號寫）

別紙第三　加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件（昭和九年十二月一日附在加公使來信機密公第二〇四號寫）

別紙第四　加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件（昭和九年十二月六日附在加公使來信公第二〇九號寫）

本信寫送付先　在加公使　在晩香坡領事

（別紙第一）

機密公第一九九號

昭和九年十一月二十七日

在加奈陀

特命全權公使　德川　家正

外務大臣　廣田　弘毅殿

加奈陀實業視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件

本件ニ關シ十一月十日附機密公第一八七號往信ヲ以テ申進置ノ次第アル處其ノ後本使ニ三主ナル商業會議所員ト邂逅ノ機會ニ同會議所支那視察團ノ滿洲行ヲ慫慂シ置タル處同視察團事務ニ携リ居ル R. E. Thorn(Thorne)十一月二十七日本使ヲ來訪シ同國メ假旅行日程表（附屬書（省略）參照）ヲ示シ本使ノ意見ヲ求メタルニ付右日程表ニヨレハ奉天ニノミ三日間滯在ノコトト相成ル處滿洲國視察ノ爲ニハ奉天ノミナラス大連、新京及哈爾賓ニ赴クコト肝要ニシテ尠クトモ大連及新京ハ缺クヘカラサルモノト考フル旨ヲ答ヘ置タリ

就テハ同視察團ノ滿洲行ヲ歡迎セラルル御意向ナルニ於テハ可成早目ニ滿洲國側ヨリ適當ノ向ヲ通シ同國歡迎ノ意ヲ通セシメ置カルルコト可然ト存ス

此段重ネテ申進ス

本信寫送付先　在晩香坡領事

（別紙第二）

機密公第三四五號

昭和九年十一月十九日

在晩香坡領事　石井　康

外務大臣　廣田　弘毅殿

加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件

本月十日附在加德川公使發外務大臣宛機密公第一八七號ニ關シ御承知ノ如ク當地方ハ本邦及滿洲國ト最モ密接ナル通商關係ニアルニ鑑ミ當地有力實業家ヲシテ右視察團一行ヘ參加セシムルコトハ事宜ニ適シタルモノト認メラルルノミナラス當地方人士カ最近ノ滿洲國產業進展振リニ付著シク注目シ來レルコトハ小官ニ對スル講演ノ依頼其他各種ノ問合セ等ニヨリ顯著ナルヲ以テ此機會ヲ捉ヘ彼等ヲシテ滿洲國ノ異常ナル發展ヲ實地ニ見學セシムルコト有益ナル可シト被思考

就テハ當地方人士ヲモ右一行ノ滿洲國視察團加入勸誘方可然トノ御方針ナルニ於テハ同樣御詮議ヲ得度ク小官トシテハ當地商業會議所其他ニ勸誘致度存スルニ付何分ノ儀御回示相煩度此段御依頼申進ス

本信寫送附先　在加公使

（別紙第三）

機密公第二〇四號

昭和九年十二月一日

在加奈陀

特命全權公使　德川　家正

外務大臣　廣田　弘毅殿

加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件

本件ニ關シテハ十一月二十七日附機密公第一九九號往信ヲ以テ申進置ノ次第アリタル處在晩香坡石井領事ヨリモ十一月十一日（十九カ）附同領事發貴大臣宛機密第三四五號ヲ以テ稟請ノ次第アリタルニ付本使ハ不取敢加奈陀商業會議所外國貿易部長 Thorne 宛別紙寫ノ通リ申入レ置キタリ委細右ニ就キ御承知相成度此段申進ス

本信寫送付先　在晩香坡領事

December 1, 1934.

Dear Mr. Thorne,

With reference to our conversation of the other day regarding the possibility of The Canadian Chamber of Commerce delegation going to Manchuria next year, the following information may interest you.

In endorsing my recommendation to the Japanese Government that the Canadian Trade Delegation might be taken to Manchuria on its visit to China, Mr. K. Ishii, Japanese Consul at Vancouver, proposed to urge principal business men in that part of Canada that they should be well represented in the delegation, in view of the important and special position British Columbia holds in the trade between Canada and the Far East.

I need hardly say that I entirely agree with him on that point.

Yours sincerely,
(Signed) I. M. TOKUGAWA

Mr. R. E. Thorne,
4007 Cote des Neiges Road,
Montreal, P. Q.

(別紙第四)
公第二〇九號
昭和九年十二月六日
在加奈陀特命全權公使　德川　家正
外務大臣　廣田　弘毅殿

加奈陀實業家支那視察團ノ滿洲國視察勸誘方ニ關スル件

本件ニ關シ十二月一日附機密公第二〇四號往信ヲ以テ申進置ノ次第アリタル處今般加奈陀商業會議所外國貿易部長Thorneヨリ晩香坡地方實業家ノ本視察團參加方モ既ニ考慮セラレ居ル旨別紙(省略)寫ノ通リ申越シタルニ付委細右ニ付キ御承知相成度此段申進ス

本信寫送付先　在晩領事

編注　本公信に対し五月二十一日付在満州国南大使より広田外務大臣宛公信公機密第八七六号を以て「満洲國側ヨリ本件視察團來滿ノ際ハ出來得ル丈ケ斡旋致度」との回答があった。

747　昭和10年4月4日　在仏国佐藤大使より広田外務大臣宛(電報)

ドリヴィエ側財団と旧ドリル側財団の合同新会社設立が難航し代表者の満州国派遣も無期延期の見通しについて

パリ　4月4日前発
本省　4月4日前着

第一一三號

貴電第五六號ニ關シ(滿洲企業組合一件)

(一)「フーゼール」側ヨリ左ノ通リ回答アリタリ

冒頭貴電ノ滿鐵側回答ヲ待チ居リタル爲合同新會社Sadamノ設立行爲意外ニ遲レ其ノ間小林順一郎ニ聯絡ヲ依頼シ協會側ヨリモ Comptoir franco-belgo-sarrois pour la vente des tubes(客年往電第三八一號(一)ノ(イ)參照)極東駐在

員Vagnieuxナル者ヲ大連ニ派遣シタル關係上及英國「バーンビー」側モ何等具体的注文ヲ受ケ居ラサル模様ニ付今直ニ「フーゼール」其ノ他渡滿ノ必要ナシト認メ本件旅行一時無期延期ニ決定セリ尤モ滿鐵側ヨリ重要注文ヲ受ケ得ルコトトモ知ラハ「フーゼール」渡滿スルコトアルヘキモ其ノ場合ニテモ諸般ノ都合上本年秋以後トナルヘシ

(二)客年往電第五八一號ノ八千法ハ寄附者側ニ返還スルコトトセリ

里昂ヘ暗送セリ

748　昭和10年4月23日　広田外務大臣より在満州国南大使宛

モパン社の代表が東亜土木会社との合資会社設立に関し謝意表明について

亞三機密第四〇五號
昭和十年四月二十三日
外務大臣　廣田　弘毅
在滿
特命全權大使　南　次郎殿

佛國印度支那銀行支店ヲ滿洲ニ設置方ノ件

「ブロツサール、モパン」會社代表「ルシアン、メルレ」ニ關シテハ本年二月十八日附公普通第二四五號貴信ヲ以テ御報告ノ次第アル處同人過日係官ヲ來訪シ今般東亞土木トノ間ニ合辦會社設立ニ關スル具体的協議ヲ遂ケ四月二十四日大連ニ於テ創立總會開催ノ運ト爲リタルカ右會社今後ノ事業等ニモ關連シ印度支那銀行(「ブロツサール、モパン」ノ背後ニ同銀行在ル次第ハ豫テ御承知ノ通)支店ヲ大連又ハ其ノ他ノ適當ノ地(滿洲國内ニテモ可ナル由)ニ設置シ度計劃アル處右ニ關スル我方ノ意嚮承知シ度旨申出タリ右申出ハ一應尤モト認メラルル處滿洲國側及關東局ニ於ケル爲替管理等ノ關係竝ニ外國銀行取扱上ノ都合モアルヘキニ付右ニ關スル關係方面ノ内意一應御聽取相成何分ノ儀御回示相煩度此段申進ス

尚本件ニ付テハ對滿事務局トモ連絡シタル處同局ニ於テハ餘リ氣乗リセサル内意ナル由ニ付右御含迄ニ申添フ

749　昭和10年4月30日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

イタリア企業家組合より満州国への視察員派遣に助力方要請について

機密第一二一號　（6月1日接受）

昭和十年四月三十日

在伊

特命全權大使　杉村　陽太郎（印）

外務大臣　廣田　弘毅殿

伊國工業團体ノ滿洲國視察團員派遣ニ關スル件

本件ニ關シテハ不取敢電報ヲ以テ御手配ヲ願出置タル處「ドウ、バッサン」四月三十日來館(一)曩ニ提出シタル覺書（機密第八三號參照）ニ對スル我方ノ見解ヲ詳悉シタル後視察團派遣ノ可否ヲ決セントシタルモ斯クテハ徒ニ時機ヲ失スル惧アルニ付不取敢「カヴアツリ」（Cavalli）ヲ出張セシムルニ決シタルコト(二)「ムツソリーニ」モ近頃「チアノ」カ張學良ト結ンテ對支進出ヲ圖ラントスルノ妥當ナラサルニ氣付キ東亞ニ於ケル安定勢力タル日本側ト協力スルノ利ナルヲ思ヒ熱心ナル支持ヲ與ヘントスルニ至リタルコトヲ告ケ助力ヲ求メタレハ曩ニ御訓示ノ次第モアリ前途ニ種々困難アルヘキ旨ヲ說述シタル後在滿大使館及滿鐵ニ「カヴアツリ」紹介方ニ付電請スヘキ旨ヲ約シ置ケリ「ドウ、バッサン」ハ支那通丈ケアリテ善ク吾カ方ノ事情ヲ解シ必要ナル指令ヲ「カヴアツリ」ニ與フヘキ旨ヲ述ヘ別紙（省略）ノ如キ覺書ヲ手交シテ引取レリ

右御參考迄ニ申進ス

750　昭和10年5月20日　在伊国杉村大使より広田外務大臣宛

イタリア企業家組合が満州国への視察員派遣を延期した旨通報について

機密第一四三號　（6月14日接受）

昭和十年五月二十日

在伊

特命全權大使　杉村　陽太郎（印）

外務大臣　廣田　弘毅殿

伊國工業團体ノ滿洲國視察ニ關スル件

四月三十日附拙信機密第一二一號ニ關シ五月十五日「ド、バッサン」Fiat, Pirelli, Ercole Marelli, Magneti Marelli, Idrovolanti Alta Italia ノ五社代表者ヲ同伴來訪過日上海「フィアト」社員「カヴァッリ」ヲ滿洲國ニ派遣スル件ニ付願出デタルガ其ノ後篤ト協議ノ結果東亞及滿洲國ニ對スル基礎的智識ナキニ拘ラズ此ノ際視察團ヲ派遣スルガ如キハ尙早且輕卒ナレバ延期ニ決シタル旨ヲ述ベ種々辯解スルトコロアリ次デ將來ノ對策ニ付大体ノ指示ヲ得度シトテ先ヅ航空機製作業ニ付先年本邦ニ教官タリシ陸軍武官某ヲシテ種々我方ノ事情ヲ本使ニ質問セシメタレバ我ニ於テハ三菱中島ヲ初メトシ現ニ立派ナル工場設立セラレ佛國等ノ特許ヲ讓受ケ盛ニ製作シ居ルヲ以テ飛行機其ノモノノ賣込ミハ望ナキモ特許ヲ讓渡シ技師派遣等ノ方法ニ依リ見込アルヘキコトヲ告ゲタリ（此ノ點ニ付三菱重工業鄕古常務ガ昨年視察シタル所ニ依レバ爲替上ノ面倒アルコト及肥料製造ニ付テハ既ニ日伊間ニ滿足ナル協力行ハレ居ルコトヲ指摘ス）又自動車及鐵道電化等ニ付質問シタレバ「フオード」及「ゼネラル、モーターズ」ノ我國ニ於ケル活動竝ニ瑞典ノ電氣工業トノ協力ヲ述ベ其ノ他手許ニ在ル材料ニテ能フ限リ我國ヲ中心トスル東亞殊ニ滿洲國ノ工業ニ付說述シタルニ東亞ノコトハ先ヅ日本ト提携セザルベカラズ而シテ其ノ提携ハ先ヅ日伊實業家間ノ談合ヨリスルヲ順序トストノ點ニ意見一致シ本使ヨリ差向キ在英佛滿鐵、三井及三菱ノ代表者ニ紹介スルコトトセリ

伊國工業界ニ於テハ東亞ニ關スル智識缺如シ殊ニ我國ノ地位及實力ニ對スル正シキ認識ナキノミナラズ「チアノ」ガ我ニ對抗シテ支那ニ進出セント企テ「ムツソリーニ」モ亦之ニ動カサルル實情ナレバ先以テ啓發ノ要アリ

他面我陸、海軍及民間技術家ノ意見ニ依レバ伊國ノ技術ハ資金不充分ナル我ニトリ參考ニ供シ得ルモノ尠カラザル趣ナレバ何等カ好意ヲ示シ以テ(一)近來益々困難トナレル當國工場ノ視察等ヲ容易ナラシムルノミナラズ（五月十四日「スヴイチ」次官ト會見ノ際獨逸ノ工場ガ我ニ開放セラルルニ拘ラズ伊其ノ他ニ於テ我方ノ參觀ヲ拒否スルガ如キ態度ニ出デンカ日本ノ工業技術ハ久シカラズシテ獨化セラレ獨逸ノ獨占ヲ見ルニ至ルベキコト必然ニシテ現ニ獨ノ對日輸出ガ夥シキ數額ニ達スルヲ見テモ此ノ點反省ノ要アリト注意シ置ケリ）(二)我ヨリノ輸入品ニ對シ頻リニ制限ヲ加ヘントスル伊國側ノ態度ヲ幾分ニテモ緩和スルコトト致度ク（「スヴイチ」次官ニ對シ日伊ノ如キハ徒ニ消極的ノ制限ヲ事トセズ進デ積極的ニ協力セザルベカラザルコトヲ說キタ

ルニ同感ノ意ヲ表シタリ）從テ滿洲國ニ對スル伊國視察團ニ對シテモ之ヲ教育シツツ希望ヲ將來ニ抱カシメ以テ適宜之ヲ利導スルノ策ニ出ヅルヲ然ルベシト認メ其ノ方針ニテ措置シツツアリ右御含迄

751　昭和10年7月15日　広田外務大臣より在滿州国南大使宛

対滿投資事業への参入をめざす仏国側ニ財団が合同し新会社ＳＯＤＡＭ設立について

亞三普通第七三八號

昭和拾年七月拾五日

外務大臣　廣田　弘毅

在滿洲國

特命全權大使　南　次郎殿

日佛合辦對滿投資事業ニ關スル佛國側組合成立ニ關スル件

本件ニ關シテハ客年十一月下旬本大臣發電報ヲ以テ御承知ノ通「フウジエール」側及ヒ「モアラン」側兩團体合同シテ新組合ヲ設立スルコト、ナリタル次第ナルカ今般在佛大使ヨリ本件新組合ハ Société Anonyme pour le développement des Affaires avec la Mandchourie（略稱 SODAM）ナル名稱ノ下ニ五月廿九日巴里ニ於テ正式ニ設立セラレタル旨同組合代表者ヨリノ公式通知ニ接シタル趣ヲ以テ別紙（省略）寫ノ通報告アリタリ此段申進ス

752　昭和10年7月15日　広田外務大臣より在仏国佐藤大使宛

日仏協同対滿投資調査会の曽我会長がＳＯＤＡＭ代表者を伴い外務省表敬について

亞三機密第一二四號

昭和十年七月十五日

外務大臣　廣田　弘毅

在佛國

特命全權大使　佐藤　尚武殿

日佛對滿事業公司設立ニ關スル件

本件ニ關シテハ本年六月十四日附貴信公第五一五號ヲ以テ御報告ノ次第アル處本年七月一日日佛協同對滿投資調査會（同會ニ付テハ客年三月十四日附往信亞三機密第三三號參照）會長曾我子爵ハ佛人 Eugène Vagneux ナル者ヲ帶同桑島東亞局長ヲ來訪シ同人ハ今般佛國側財團ノ代表者トシテ日佛對滿事業公司設立ニ關スル滿鐵側トノ交渉其ノ他佛國ノ對滿投資事業ニ當ル事トナリタリト述ヘ尚參考トシテ別添滿鐵支社宛書翰寫及本年五月廿一日附右公司ノ正式設立ニ關スル「モアラン」ノ滿鐵山崎理事宛書翰寫（本書翰內容ハ冒頭貴信添付ノモノト同一）ヲ提出シタルニ付右御參考迄茲ニ通報ス

尚右「ヴアニユー」ト同公司トノ關係其他參考トナルヘキ事情ニ付何等御聽込アラハ御報告相煩度此段申進ス

本信寫送付先　在滿大使

（別　添）

昭和十年六月二十八日

日佛協同對滿投資調査會
會長
子爵　曾我　祐邦

南滿洲鐵道株式會社
東京支社長　大淵　三樹殿

一、日佛對滿事業公司設立に關する件

謹啓愈々御清榮之段奉慶賀候

陳者日佛對滿事業公司設立に關し昨秋以來諸種の事情有之、今日迄迅速設立の段取りと成らざりし儀不惡御諒承相願度候就ては今回別紙寫の通り佛國側より貴社山崎理事宛直接文書有之候譯文相添御通報申上候

該書面中にある佛人ヴアニユー氏は佛國ポリテクニツク出身の實業界の俊才に有之、豫備砲兵少佐にして、歐洲大戰當時は露軍の砲兵教官とし、又參謀部に於ける佛露軍連絡將校として大に活躍されたる人にして、共產革命の際には、投獄迄されたる人にて露國內の事情には通じ居る人物に有之、西比利亞出征當時も佛軍參謀部に勤務し、爾來日本を知りて、佛國內に於ける有數の有力なる親日家に有之、小生及び小林大佐とも多年辱知の間柄の人物に有之申候

現在事業界に於ては、諸種の會社の重役に有之申候

滿洲事變以來佛國內に在りて、政界、事業界の裏面に於て、極めて有力に且自費を以て親日宣傳に從事し、日佛提携を以て、世界平和の樞軸たらしめんことに十年一日の如く努力し來れる人物に有之申候間左樣御含み置被下度候

日佛關係としては小林大佐の社長たるエム、テイ、エム共

販株式會社重役、竝本調査會の理事等を致居り今日迄實質的に公司設立促進に關し佛國側との交渉を續け來れるものに有之昨年以來駐日罷在候者に有之申候

此儀何卒貴本社に御傳ひ被下度候

同氏は目下在京何時にても御下命に依り拜芝、諸事御打合せ申上度申居候間何分共に宜敷御願申上候

又同氏よりは直接挨拶狀を大連山崎理事宛郵送致候

又御都合好き時、拜芝拜眉御挨拶申上度申居候間可然御差圖相願度

先は右要用迄　　敬具

（譯）

Société Anonyme pour le Développement des Affaires avec Mandchourie "(SODAM)"
對滿事業育成株式會社
本社　巴里メツシーヌ街六番地
資本金　六拾萬法
略稱　「ソダム」

一九三五年五月三十一日

副社長　モアラン
署名

南滿洲鐵道株式會社
理事
山崎　元幹殿

拜啓

本月廿九日當地ニ於テ兼テ問題ト相成リ居申候對滿事業育成株式會社公式ニ成立致候、社長不在ノ爲メ重役會議ノ決議ニ依リ之レニ代テ右御通牒申上候

總會後、直ニ第一回重役會議ヲ開キ左ノ如ク役員ヲ決定致候

社　長　佛國經濟發展協會總裁　エ、フージエール
副社長　佛國北部鐵道會社名譽副理事　ア、モアラン
事務取締　ペ、ヂユフール
尙ホ重役會ハ左ノ五氏ト相成候
エ、フージエール
ア、モアラン
ペ、ジユフール

エル、フロリー
ア、ドウデ

而シテ本「ソダム」社ニ加入會社名ハ別紙ノ通リニ有之申候

以上ノ如ク「ソダム」ハ我ガ佛國ニ於テ、最モ有力ナル工業的企業會社ヲ撰擇仕リ之ヲ相纏メルコトニ成功致シタル次第ニ御座候

我々ハ日佛對滿事業公司ガ此際迅速ニ成立シ尊敬スベキ貴社ト價値大ナル協力ノ結果、軈テ期待スル第一ノ好果ヲ齎スヤ否ヤ他ノ有力ナル會社モ續々參加シ來ルベキコトヲ確信罷在候

斯クシテ從來ノ準備時期ニ引キ續キ今回日佛對滿公司ノ成立トイフ第二階段ヲ踏ミ越エ得ルコトニ相成申候從テ當方ノ第一回ノ出資額金貳萬五千圓ハ準備致居候間何時ニテモ貴方ノ御思召ニ從ヒ可申候

就テハ目下東京千駄ケ谷四ノ七七五在住ヴアニユー氏ヲ我々ノ代表トシテ公司内ニ入ラシムルコトニ相定メ申候而シテ同氏ニハ直ニ貴方ト連絡シ相共ニ種々ノ必要ナル御協議ニ應ゼシムルコトニ致シ候

公司定款草案中ニハ重役ハ六名乃至十二名ト相成居リ滿鐵ヨリ半數、佛國側ヨリ半數差出スコトニ相成居候我々ノ考ニテハ當分取敢ヘズ六名ニテ滿足シ當方ヨリハ左ノ三氏ヲ任命致度候

佛國經濟發展協會總裁　エ、フージエール
（公司副社長トイフ積ニテ）
ア、モアラン
エ、ヴアニユー

エ、ヴアニユー氏ヲ公司ノ專務ノ一名ト成サル、樣提言仕候

「ソダム」ノ重役會ハ終ニ斯クノ如ク佛國ニ於テ有力ナル團體ヲ成形シ得タルコトヲ欣快トシ、之レニ依ル日佛兩國ノ協力ガ佛國ト滿洲國トノ經濟關係ヲ助長スルコトニ到ランコトヲ希願罷在候

敬具
副社長
ア、モアラン

753
昭和10年8月7日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛（電報）

独国による対満経済提携協議のための使節団派遣計画に関し事情調査方在独国大使館へ要請について

新　京　8月7日後発
本　省　8月7日後着

第七三二號
本使發獨宛電報
第四號

今般在哈爾賓獨逸領事「バルザー」ヨリ外交部大臣宛公文ヲ以テ siloanlage（米國ノ grain elevator ノ如キモノ）ノ專門技師 Covus ナル者豫テ同領事ヨリ本國關係筋ヘ送付シ置キタル獨滿經濟提携ニ關スル或ル種ノ計畫案（「シーロー」機械ノ賣込及右機械ニ依ル大豆精選會社ノ設立ニ關スルモノナル趣）ニ關シ獨逸政府ノ意嚮ヲモ確メ得タルヲ以テ近ク來滿ノ筈ニ付同人ノ視察等ニ對シ便宜供與方ヲ申越スト共ニ更ニ内密ノ情報トシテ獨逸政府ハ滿洲側ノ同意ヲ條件トシテ前記計畫實現ノ資金問題其ノ他經濟提携方策協議ノ爲今秋「ミツション」派遣方ヲ計畫中ナル旨（一行ハ國立銀行副總裁、大使、外務省參事官（前駐日商務官「クノール」）、輸資統制官、貿易管理官各一名並ニ實業家若干名ヨリ成ル趣ナリ）通報アリタル趣ナリ依テ右ニ對スル滿側ノ態度ヲ決定スル爲日滿兩國ノ關係者ニ於テ相談ノ結果差當リ「カーバス」ノ視察ニ對シテハ出來得ルタケ便宜ヲ供與スル事但シ同人ヨリ何等カノ提案アル時ハ何レノ方面ニテモ「コンミツト」セサル事ヲ申合スト共ニ從來此ノ種獨逸側ノ視察者ハ兎角自己關係會社ノ利益ノミヲ目的トシ獨逸政府ハ勿論同國一般當業者ト何等ノ聯絡無ク爲ニ眞面目ニ交渉相手トスル能ハサリシ等ノ事情モアリ今回ハ事前ニ充分其ノ眞相ヲ確メタル上對處スル事トナリタルニ付テハ㈠「カーバス」及前記「ミツション」渡滿ノ目的及政府トノ關係㈡滿獨間又ハ日滿獨間ニ經濟關係促進ニ付何等具體的方針（例ヘハ物々交換又ハ割當制等）ヲ有スルヤ㈢獨逸側ニテハ必要ニ應シ現行ノ滿洲大豆ノ輸入制限又ハ統制規程ヲ緩和スルカ如キ例外的取扱ヲ爲スノ用意アリヤ又ハ國内法制上可能ナリヤ㈣獨逸側ハ本件「ミツション」ヲ日本ニ對シ如何ナル關係ニ置カントスルモノナリヤ㈤獨逸側ハ本件「ミツション」派遣ニ關シ蘇聯ニ對スル關係ニ於テ何等政治的意義ヲ附セントスルモノナリヤ其ノ他御氣付ノ點夫レ

ト無ク御探査ノ上御回電アリタシ
尚本件「ミツション」ニシテ眞面目ナル目的ヲ有シ且政府ヨリ何等カノ權限ヲ與ヘラレ居ルニ於テハ滿側ニ於テハ出來得ル丈ケ之ヲ歡迎シ先方ノ希望ニ依リテハ何等カノ契約又ハ協定締結方ニ付テ相談ニ乘リ差支無シトノ意嚮ナリ
尚本件ニ付テハ當分ノ間日滿側ニ於テハ一切公表セサルコトトセリ
大臣ヘ轉電セリ

754　昭和10年8月10日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛（電報）

独満経済提携協議のための使節団派遣計画に関する在独国大使館の調査結果について

新　京　8月10日前発
本　省　8月10日後着

第七四〇號
獨[1]發本使宛電報
第二號
貴電第四號ニ關シ

九日外務省係官往訪聞キ得タル大要左ノ通
一、御來示ノ「カーブス」（Muehken Industrie（Industrie?）會社技師）ハ政府トハ何等關係ナキモ本件「シロー」計畫ニ對シテハ政府ニ於テモ輸出振興ノ意味ニテ或種ノ保障ヲ與ヘ居リ本人ハ二週間程前渡滿ノ途ニ就キタルカ貴地方面ニ於テ何等具體的ノ下話出來タル際ハ後述經濟使節ニ於テ本件ヲ取上ケ對滿貿易調節案中ニ織込ム考ナリ
二、極東經濟使節（大略本日發送シタル七月一日附大臣宛拙信ニテ御覽アリ度）ハ在獨中ノ「キープ」公使及「クノール」書記官兩名ノミニ止マリ一切實業家ヲ交ヘス（尤モ關係獨逸當業者ヨリモ夫夫此ノ機會ニ現地ニ代表者ヲ送リ置キ右使節ト聯絡ヲ採ラシムル由）加奈陀經由十月末横濱著十一月十七八日頃渡滿ノ豫定在滿期間ハ貴地ニ於ケル談合ノ具合ニテ伸縮ス
三、[2]使節ハ日本ニ對シテハ主トシテ日獨貿易ノ維持增進ヲ計ルニ在ルモ滿洲國ニ對シテハ獨逸ノ割當量以上ノ大豆輸入ハ獨逸製品ノ購入ニ對シ之ヲ許可スル方針ニ關シ何等具體的了解ヲ確立シ度キ希望ヲ有ス（割當量ノ增減ハ一ニ行政官廳ノ手心ニテ爲シ得）

四、使節ハ全然經濟的諸問題ノ研究及解決ニ在リ何等政治的色彩ヲ有セス

五、前記三記述了解ハ形式トシテハ或ハ政府間ノ協定ヲ採ルコトモアリ得ヘシ（滿洲國承認ノ問題起ラスヤトノ本官ノ質問ニ對シ蘇聯邦北鐵關係條約ノ如ク正式承認ニ觸レスシテ行ヒ得ル樣考フト答辯アリタリ）

大臣ヘ轉電アリタシ

755　昭和10年9月27日　在ベルギー有田大使より　広田外務大臣宛

ベルギーにおいて対満経済活動のための新会社が設立され視察員派遣を研究中について

機密第二九七號　（10月18日接受）

昭和十年九月二十七日

在白　特命全權大使　有田　八郎〔印〕

外務大臣　廣田　弘毅殿

白滿商業並ニ企業會社設立ニ關スル件

白國政府並ニ實業家ノ滿洲國ニ對スル關心ニ關シテハ累次報告申進メタル通ナル處（客年十一月八日附普通第二一七號同年十二月十五日附機密第二四六號往信參照）過般白國實業家（主トシテ在「リエージユ」工業家）ハ白國外務省ト連絡ヲ採リ白滿商業並ニ企業會社（Sobecem 卽チ Société Belge de Commerce et l'Entreprises en Mandchourie）ヲ設立シ在「リエージユ」帝國名譽領事「バール」ヲ社長ニ日白協會書記長「ロシニオル」ヲ專務取締役ニ推シ（元在哈爾賓總領事山內四郎モ取締役中ニ列ス）別紙（省略）ノ定款ヲ採擇セルニ付右定款茲許送付ス

本件會社設立ニ際シ當方ハ何等關與シ居ラサルノミナラス曩ニ在「リエージユ」名譽領事ヨリ右計畫ニ付當方ニ豫メ通報アリタルニ際シテモ名譽領事タル公ノ資格ヲ示スハ面白カラサル旨ヲ示唆シ置キタル次第ニテ其ノ結果トシテ同名譽領事ハ單ニ一技師ノ資格ニテ社長ニ就任セルモノト存セラル

尙山內四郎ハ最近來白ノ際本使ニ對シ本會社カ適當ナル日本人ヲ重役中ニ加ヘント欲シ兼テ物色中ナリシ處同人ハ先年「リエージユ」博覽會ニ關係セシ當時ヨリ「バール」トハ懇意トナリ居タル關係上右重役ニ推サルルコト、ナリタルカ他方右受諾ハ同人ノ佛國ニ於ケル現職務ニ何等支障ヲ及ホサヽルモノト思考シ居ル旨、並ニ本會社ノ滿洲國ニ於ケル活動計畫トシテハ差當リ別段白國人ヲ派遣スルコトナク現地ニ於ケル日本人ヨリ然ルヘキ人物ヲ探シ右日本人ヲシテ本會社活動ノ機會ヲ求メシメ必要ニ應シ白國人ヲ派遣シテ研究セシムヘキヤ否ヤヲ決定セントスルモノナル旨ヲ內話セルニ付右御參考迄申添フ

本信寫送付先　在滿大使

756　昭和10年10月2日　広田外務大臣より　在中国有吉大使他宛

ドイツ政府が派遣する東洋経済使節団の任務および団員名等について

通一機密合第一七六〇號

昭和十年十月二日

外務大臣　廣田　弘毅

在中華民國　特命全權大使　有吉　明殿

獨逸ノ東洋經濟使節團派遣方ニ關スル件

過般在獨武者小路大使ヨリ其ノ歸朝ニ先立チ獨逸外務大臣及同次官ヲ往訪ノ際先方ヨリ獨逸政府ニ於テハ獨逸ノ對東洋貿易振興促進ノ目的ヲ以テ今秋政府ノ經濟使節團ヲ東洋ニ派遣スヘク目下使節團ノ組織等考慮中ナル旨申出アリタル趣報告越タル處同大使ヨリノ報告及其後在獨井上代理大使ヨリノ報告等ヲ綜合スルニ本件經濟使節團ハ愈々十月五日獨逸出發同月末本邦到着ノ豫定ナルコト判明致シタルニ付其ノ任務、團員名、旅程等概要別紙ノ通右何等御參考迄茲ニ送付ス

本信送付先　在支大使　在北平參事官　在支各總領事　在上海商務官　在暹羅公使

（別紙）

獨逸ノ東洋經濟使節團概要

一、獨逸ノ東洋經濟使節團ノ主要任務

右經濟使節團ハ何等政治的色彩ヲ有セサルモノニシテ其ノ主要任務ハ東洋方面ニ於ケル經濟諸問題ノ研究及解決卽チ獨逸ノ對東洋貿易振興促進ニアリテ本邦ニ對シテハ日獨貿易ノ維持增進ヲ計ルト共ニ滿洲、支那方面殊ニ滿洲ニ對シ

757　昭和10年10月2日　広田外務大臣より在中国有吉大使他宛

在本邦ドイツ大使館が東洋経済使節団派遣に関し通報について

通一機密合第一七六一號

昭和十年十月二日

外務大臣　廣田　弘毅

在中華民國

特命全權大使　有吉　明殿

獨逸ノ東洋經濟使節團派遣方ニ關スル件

本件ニ關シテハ十月二日附通一機密合第一七六〇號ヲ以テ申進置ノ次第アリタル處其後在京獨逸大使館ヨリ更ニ別紙ノ通申入來レルニ付テハ御參考迄右茲ニ追報ス

本信送付先　在支大使　在北平參事官　在支各總領事　在上海商務官　在暹羅公使

（別　紙）

獨逸產業視察團ニ關スル件

九月十二日在京獨逸大使館「ハース」商務官來訪通商局係官ニ對シ左ノ申入ヲナシタリ。

『現ニ公使ノ地位ニ在ル「キープ」氏、外務省「クノール」書記官（前駐日獨逸商務官）及「ライヒスバンク」專門家「ローゼンブルック」氏ノ三名ヨリ成ル日本滿洲產業視察團ハ來ル十月末本邦ニ來着ノ豫定ナルカ、前兩名ハ加奈陀經由、「ライヒスバンク」專門家ハ「スエズ」經由東京ニテ落合ヒ約二週間滯在、日本ノ政府當局及實業界ノ有力者ト懇談シ度キ希望ヲ有ス。夫ヨリ約三、四週間ノ豫定ヲ以テ滿洲國ノ產業視察ヲナスベク同國ニ於テモ產業關係當局及民間有力者ト話合ヲ遂ゲ度キ希望ナリ。滿洲國視察後ハ支那ニ赴ク筈ナルカ、視察ノ眼目ハ滿洲國ニアリテ支那ニハ特別ノ要務ナキモ唯支那ト滿洲國トノ機微ナル關係ニ鑑ミ支那側ノ疑惑ヲ避クル爲立寄ラントスルニ過キス、殆ト通過ト同樣ナル次第ナリ。

本產業視察團ニ關シ特ニ日本側ニ依賴シ度キハ左ノ諸點ナリ。

一、本視察團ハ「オフイシャル、ミッション」ニ非ス、唯團員カ外務省ノ有力者及有力ナル銀行家ヲ以テ組織セラレ居ルニ過キス。特ニ「オフイシャル、ミッション」トセテハ獨逸ノ對滿貿易調節方ヲ試ミントスルニアル趣アリ尙我方ヨリハ先方ニ對シ對東洋經濟關係ハ先以テ本邦側トノ諒解提携ヲ前提トスルコト必要ナル次第ナルヲ以テ一行ハ他ノ東洋地方旅行ニ先立チ先ツ日本ヲ視察シ本邦當業者及關係方面ト接觸シ帝國ノ立場竝最近常ニ獨逸側ニ有利ナル日獨通商關係等ニ付充分認識ヲ深ムルノ肝要ナル次第ヲ申入レ置キタリ

二、經濟使節團員名及其略歷

㈠現官、無任所公使「キープ」氏、同公使ハ東洋方面ノ經驗ハナキモ曾テ在華府獨逸大使館參事官及在紐育總領事等ニ歷任シ過般獨逸ノ南米經濟使節ニ加ハリ同地方ヲ旅行シ各國トノ間ニ通商協定ヲ締結シタル經驗アリ「ネゴシエーター」トシテ充分其ノ手腕ヲ認メラレ居レリ

㈡前在本邦獨逸大使館商務書記官「クノル」氏

現在獨逸外務省ニ於ケル極東方面通商經濟諸問題ノ擔任者ナリ

正式團員ハ以上二名ノミナル處獨逸側ニテハ本使節團派遣計畫ノ當初ハ一行中ニ金融業者ヲモ加フル豫定ナリシモノノ如キモ人選上ノ都合モアリ之ヲ取止ムルコトトシ又一行中ニ當業者ヲ加フルヤ否ヤノ問題ニ付キテモ例ヘハ「クルップ」、「シーメンス」等特定會社ノ代表者ノミヲ入ルルニ於テハ選ニ洩レタル方面ニ不平ヲ生スヘキニ付寧ロ一行中ニハ正式ニ之ヲ參加セシメス關係獨逸當業者ヨリハ夫々此ノ機會ニ一行往訪ノ各地ニ代表者ヲ送リ置キ右使節ト聯絡ヲ採ラシムルコトトナリタル趣ナリ

三、旅　程

一行　獨逸出發豫定日　大体十月五日頃

「カナダ」經由、「エムプレス、オブ、エシア」號ニテ十月三十一日横濱着ノ豫定

本邦滯在期間　二週間

其ノ間本邦官民ニ對シ獨逸經濟界ノ實情ヲ述ベ其ノ諒解ヲ求メタル上渡滿

滿洲國ヲ濟マセタル上ハ北平、南京、上海、南支ヲ經由シ次第ニ依リテハ暹羅ヲモ訪問スル豫定ナル由

尙一行ノ旅程ニ付イテハ近ク確定ノ上在京獨逸大使館ヲ通シ帝國政府ニ正式申入ノ積ナル趣ナリ

サリシハ其主タル使命カ滿洲國視察ニアル關係上、獨逸ノ立場ヨリ支那關係ヲ顧念シタルニ依ルモノナリ。故ニ日本及滿洲國ニ於テ話合ノ結果特定事項ニ付獨逸政府ノ「オーソリゼーション」ヲ必要トスル時ハ當該事項ニ關シ「オフイシャル、ミッション」ノ資格ヲ與フル筈ナリ。

二、本視察團ハ政治的性質ヲ有セス。專ラ經濟的目的ヲ有スルモノナリ。從ツテ日滿諸新聞カ恰モ政治的使命ヲ有スルカ如ク宣傳スルカ如キコトアラハ、本視察團ノ目的ハ全ク沒却セラルル惧アルヲ以テ、此ノ點ニ關スル新聞紙取締方日本當局ニ於テ充分御配慮アリ度シ。

三、本視察團ハ、滿洲國ニ於テハ主トシテ大豆ノ購入問題、獨逸間「クレヂット」ノ問題竝ニ大豆精乾企業設立等ニ關シ研究スヘク、日本ニ於テハ日本品ノ購入方特ニ日本米ノ輸入問題ニ付話合ヲ爲スヘシ。

目的右ノ通リナルニ付出來得ル限リ公式宴會其他ハ控ヘ目ニ御願致シタシ。』

尚同商務官ハ我陸軍當局ヨリ在京獨逸大使館附武官ニ對シ本視察團ノ目的、資格等照會越シ居ル處近々同武官ヨリ今日ノ申入通リ日本陸軍當局ニ說明スヘク、又今明日中ニ大使ヨリ廣田大臣又ハ重光次官ニモ本視察團ノ使命ニ付申上クル手筈ナリト述ヘタリ。

758　昭和10年10月26日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛（電報）

四国借款団英国側が代表者の滿州国視察を希望について

新　京　10月26日前発
本　省　10月26日前着

第九二六號
英發本官宛電報
第三號

四國借款團英國「グループ」上海駐在員Cassels ハ十一月三日當地發西比利亞經由歸任ノ途次「アデイス」ノ希望モアリ滿洲國視察ヲ爲シ度キ趣ナル處借款團英國側カ滿洲國ニ代表ヲ出シ同國ノ現狀ヲ認識セントスルコトハ一進歩ト考ヘラルルニ付同人ノ視察ニ付出來得ル限リ便宜供與方御配慮ヲ煩度シ

尚當地正金加納支配人ヨリ在大連、奉天、哈爾賓、新京同行支配人及中央銀行鷲尾理事宛紹介狀ヲ發給シ置キタル由大臣ヘ轉電アリタシ

759　昭和10年11月7日　在独国井上（庚二郎）臨時代理大使より広田外務大臣宛（電報）

ドイツ派遣の東洋経済使節団に関しシャハト経済大臣など関係筋から得た情報について

ベルリン　11月7日後発
本　省　11月8日前着

第一三五號
滿宛往電第二號ニ關シ（獨逸ノ對東洋經濟使節一件）

其ノ後「ナチ」黨有力方面ヨリノ情報トシテ或筋ヨリ入手シタル所ニ依レハ黨部ニテハ今次一行人選ニ不滿ヲ感シ寧ロ之ヲ「デイスカレッジ」シ更メテ他ノ「ミッション」ヲ送ルコトトナルヤモ知レストノ趣ニ有之又數日前I、G側一有力者ハ本官ニ對シ同人カ政府筋ヨリ聞知セル所トシテ今次一行ハ「インフオーメーション」ヲ得ルヲ主眼トスヘク追テ右ノ結果I、G及「クルツプ」等ヨリ相當有力者東洋方面ニ旅行スルコトトナルヘシトノ話アリ彼是綜合スルニ右往電當時ト多少事態ニ變化アリタルモノノ樣存セラレタル處七日「ライヒスバンク」總裁兼經濟大臣「シヤハト」ヲ往訪ノ際談本件ニ及ヒタルヲ幸ヒ右實情ヲ尋ネタルニ同氏ハ「キープ」一行ハ外務經濟兩省協議ノ結果派遣シタルモノニシテ所謂黨側不滿ナルモノハ聞キ流スヲ可トスヘク政府トシテハ「キ」ノ手腕ニ充分ノ信頼ヲ懸ケ居ル次第ナルコト同人カ昨年南京ニ赴ケル際ハ初メヨリ條約交渉ノ爲ナリシモ今同ハ寧ロ研究調査ヲ主トシ其ノ報告進言ニ基キ具体的「アレンヂメント」ノ爲ニ當業者カ出掛クルコトアリ得ヘキコトヲ答ヘ日獨間ニ何等難問題存セサルノミナラス經濟的、政治的ニ共通點ヲ有スル兩國ノ爲今次一行ノ成功ヲ期スル旨述ヘタリ

本件一行既ニ着京種々御折衝中ト存スルニ付當方最近ノ事情御參考迄ニ右電報ス尚委細ハ十二日頃歸朝ノ豫定ナル杉下書記官ヨリ御聽取請フ

漢堡ヘ暗送セリ

760　昭和10年12月8日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛（電報）

ドイツ派遣の経済使節団と満州国外交部との間で満州大豆と独国工業製品のバーター貿易案を協議について

新　京　12月8日夜発
本　省　12月8日夜着

第一〇二一號

滿[1]側ハ獨逸經濟視察團ト三日正式會見ヲ行ヒ具體案ヲ提示シ討議シタルモ何等纏マル所ナク（會見模様ハ空送セリ）其ノ後ハ大橋次長又ハ外交部係官ニ於テ視察團側ト私的自由討議ノ形式ニ依リ交渉ヲ續ケ居タルカ現在迄ニ略意見ノ接近ヲ見タルハ左ノ諸項ナリ

一、獨逸側ハ年一億圓程度（大體百萬瓩）ノ大豆ヲ購入スルコト

二、滿洲國、關東州又ハ滿鐵附屬地内ニ根據ヲ有シ且ツ滿洲國當該官憲ノ指定スル商社ノ購入ニ係ル獨逸產品ハ獨逸國ヨリ大連其ノ他ノ滿洲國港ノ外隣接國ノ港向積出サレタルトキト雖滿側ノ購入ト看做ス（獨逸ヨリ大連其ノ他ノ港向積出サレ同港ヨリ更ニ他港ヘ積換輸送シ又ハ再輸出セラルルモノヲ含ム）

三、獨逸側ニ於テ定量年一億圓（又ハ百萬瓩）ヲ超過シテ滿洲產大豆ヲ購入スルトキハ右超過分ニ對シ「バーター」制適用ヲ建前トシ上半期末ニ於テ夫レヲ基礎トシ獨逸側ノ選擇ニ依リ數量又ハ價格ノ孰レヲ取ルヘキカヲ決定ス（豆油ハ大豆トシテ計上ス、其ノ他ノ滿洲產品ヲ含マシムヘキヤ否ヤハ未決定）

四、滿側ノ獨逸ニ輸出シタル大豆價格中ヨリ三千萬圓（滿側ハ二千萬圓ヲ主張シ未タ一致セス）ハ獨逸内ニ存置シ（「レジスター、マーク」）以テ出來得ル限リ獨逸品購入ノ義務ヲ負フ

尙[2]右諸項ニ關聯シ了解事項トシテ左ノ通リ意見一致セリ

㈠第二項ノ隣接國トハ山東、河北及朝鮮ノ諸港並ニ浦潮ヲ意味ス日本内地港ニ付テハ日本政府ノ承認ヲ得ルコト及日獨間ノ貿易比率ニハ何等影響ヲ及ホササルコトヲ條件トシテ右ヲ包括セシム

㈡第二項ノ商社トハ各國人ノ輸出入商、個人商又ハ會社及其ノ支店又ハ出張所、政府機關、公共團體又ハ市役所、滿鐵、鐵路總局、軍部機關等ヲ包括スルモノトス

㈢協定成立ノ際ハ之カ實施ノ爲相互ニ外交機關（領事又ハ商務官ノ意）乃至銀行代表ノ交換ヲ認ムル公文交換ヲ爲スコト

㈣滿側トシテハ獨逸品購入ニ關シ「レジスター、マーク」利用ニ協力シ得ルモ之ヲ强制スルコト困難ナルニ付獨逸側ニテ適當措置スルコト

㈤「レジスター、マーク」利用ニ依ル獨逸品買付値段ハ出來得ル限リ低廉ナラシムル樣獨逸側ニテ措置スルコト

㈥基礎價格ノ決定ニ關シテハ商取引ノ實情ニ照ラシ英貨標準トスルモ差支無キコト

㈦協定ハ東京ニ於テ滿獨大使間ニ締結スルコト

㈧大體案ヲ得タル上日本ニ關聯スル事項ニ付テハ獨逸側ニ於テ日本側ト協議スルコト

滿側ニ於テハ右「ライン」ニ依リ更ニ獨逸側ト折衝スル方針ナル處右協定ノ結果滿洲ニ於ケル獨逸品購入ヲ極力促進スルトスルモ二千萬圓乃至三千萬圓ノ巨額ニ達スルコト不可能ナルニ付結局第二項ノ隣接國及日本諸港ヲ加ヘテ一千萬圓乃至二千萬圓ノ額ヲ獨逸品輸入額中ニ喰込マシムルノ外無キコトトナル次第ナルカ前記「ライン」ニ依ル滿獨間協定締結方ニ對スル我方ノ意響何分ノ儀至急御回電ヲ請フ（欄外記入）

（欄外記入）

滿側カ日本側ヲ引摺リ日本及支那ニ對シ日本品賣込ニ付獨逸側ノ競爭力ヲ大ナラシメサル樣要注意

761

昭和10年12月9日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛（電報）

多額のドイツ製品購入義務設定は満州国のみでの履行不可能につき日本側と協議方満州国側より独国経済使節団へ説示について

新　京　12月9日夜発
本　省　12月9日夜着

第一〇二五號（極秘）

往[1]電第一〇二一號ニ關シ

一、八日夜大橋次長「キープ」公使ト會談シ冒頭往電ヲ以テ申進メタル外交部係官ト視察團員トノ私的會談ニ關聯シ左ノ如キ意見ノ交換ヲ爲シタル趣ナリ

先ツ公使ヨリ獨逸ノ購入義務ヲ一億圓（七千萬馬克）トスルコトハ爲替管理局ニ於テ承諾スルヤ不明ナルモ一應請訓スル意響ナルモ之ヲ百萬噸（現在ノ相場ニテハ一億馬

克)トスルコトハ獨逸ニ其ノ資力無ク問題トナラス又獨逸側ノ右購入義務ニ對シ滿側ノ購入義務ヲ三千萬圓トスルコトハ妥當ナリト思考スル旨述ヘタルニ對シ大橋ヨリ滿洲國トシテハ獨逸品ノ輸入ヲ斯ク急激ニ增加セシメ得ル見込無ク滿側ニ於テ右義務ヲ負擔スル場合ニ於テハ結局日本側ヘ肩替リヲ求メサルヲ得サル次第ニシテ前記私的會談ニ於テ獨逸側カ滿洲國ノ購入額中ニ朝鮮、北支、浦潮、日本內地諸港着ノ分ヲモ含マシムルコトニ同意セラレタルハ右ノ事情ヲ了解セラレタル爲ナルヘシト思考シタル旨ヲ述ヘタルニ公使ハ日本着ノ分ヲモ含マシムルニハ日獨間ニ何等カノ協定ヲ遂クル要アル處

日本側ニテハ斯ル協定ヲ爲スコト能ハサルニ付直接滿側ト協議スヘキ旨來栖局長ヨリ勸奬セラレタル次第ナリト述ヘタルニ付大橋ハ兎ニ角滿洲國ノ現狀ニテハ斯ク多額ノ獨逸品購入義務ヲ負擔スルコトハ日本側ノ保障無キ限リ不可能ナル旨ヲ繰返シタルニ公使ハ滿洲人一般ノ購買能力薄弱ニシテ日本品ト競爭スルコト不可能ナルヲ以テ獨逸トシテハ石炭液化機械ノ如キ大規模ノ建設事業ニ參畫スル外見込無キコトヲ承知シ居レリト述ヘタリ依テ大橋ヨリ滿側トノ間ニ協定ヲ遂クルニハ先ツ日本側トノ間ニ了解ヲ取付ケラルル要アルヲ以テ速ニ日本ニ行キ交渉セラレテハ如何ト述ヘタルニ公使ハ之ヲ諒トシ十六日大連發二十一日頃ヨリ東京ニテ會談ヲ行ヒ度ク就テハ滿側ヨリモ代表ヲ出席セシメラレンコトヲ要請セリ

二、右會議出席ノ爲滿洲國側ヨリハ外交部加藤商政科長、實業部松島農務司長、財政部伊藤文書科長ノ三名ヲ派遣スルコトトセリ

冒頭往電ノ追補旁右不取敢

762

昭和10年12月9日　在滿州国南大使より広田外務大臣宛(電報)

独国経済使節団提案のバーター貿易案は日本側の一部肩代りがなくては実施困難のため日本側支援につき配慮あるよう意見具申

新京　12月9日夜発
本省　12月9日夜着

第一〇二六號(極秘)

來栖通商局長及桑島東亞局長ヘ谷參事官ヨリ

往電第一〇二五號ニ關シ

本件滿獨間折衝經過ニ鑑ミ滿洲大豆ヲ極力獨逸側ニ購入セシムル爲ニハ滿側ニ於テ三千萬圓(二千五百萬圓迄ハ低メ得ル見込アル趣)程度ノ獨逸品ヲ購入スルコト是非共必要ナル如ク認メラルル處右ノ中滿側ニテ購入シ得サル超過分ヲ日本側ニテ肩替リスルコト絶對不可能ナラサルニ於テハ本件ニ關シ滿側ヲ援助スル樣關係ノ向ヲ御指導アリ度ク右ノ結果滿洲國ノ特產物ノ輸出ヲ增進セシメ得ルニ於テハ當國經濟力ノ開發、乃至人心安定上ノ影響甚大ナルノミナラス本件ニ關シ滿獨乃至日獨間ニ何等カノ取極ヲ爲シ得ルニ於テハ大局上極メテ望間敷キ次第ナルヲ以テ本件滿側ノ希望達成ニ關シ特ニ御配慮相煩度シ